

「人の子が来る」

2014年11月08日

マルコによる福音書 13章 24節～27節。「それらの日には、このような苦難の後、／太陽は暗くなり、／月は光を放たず、／星は空から落ち、／天体は揺り動かされる。

そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々は見る。そのとき、人の子は天使たちを遣わし、地の果てから天の果てまで、彼によって選ばれた人々を四方から呼び集める。」

主イエスは世の終わりの終末前は、世界は混沌とし、不条理に満ち溢れた苦難があると言われた。その苦難の後「太陽は暗くなり、月は光を放たず、星は空から落ち、天体は揺り動かされる」異変が起こる。天変地異をもって著す典型的な「黙示」表現である。その時、「人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々は見る。」キリストの再臨による救いが完成する世の終わり、終末の時である。

「人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来る」という句は、旧約聖書ダニエル書 7章 13節～14節の「夜の幻をなお見ていると、／見よ、『人の子』のような者が天の雲に乗り／『日の老いたる者』の前に来て、そのもとに進み／権威、威光、王権を受けた。／諸国、諸族、諸言語の民は皆、彼に仕え／彼の支配はとこしえに続き／その統治は滅びることがない」から引用されている。ダニエル書は紀元前2世紀、アンティオコス四世エピファネスによるエルサレム神殿冒瀆の迫害時代を背景にしている。神の乗り物である雲に乗った「人の子」のような者が神から権威、王権を授かり、諸国を支配し、その統治は永遠に続く。迫害に苦しんでいる人々の憧れ、願望の「黙示」であった。

初代教会において、「人の子」であるキリストが雲に乗って再臨する終末が切迫していると信じられていた。マルコ福音書の著者は、主イエスの口に乗せ、終末の到来を語り、その時「地の果てから天の果てまで、彼によって選ばれた人々を四方から呼び集める」と天国に迎えられる至福を語っている。

初代教会の熱烈な終末信仰は、この世の執着から解放され、財産を共有し、篤い愛を交わし合う共同体を形成した。しかし、キリストの再臨が遅延し、様々な議論と問題が起こって来た。使徒言行録には、金額をごまかして献げたアナニア、サフィラ夫婦、異郷から帰って来たディアスポラのユダヤ人やもめへの分配の差別などを記しているが、再臨遅延がもたらした不信と混乱であろう。

世の終わりが来るという終末信仰とは何であろうか。雲に乗ったキリストが横浜の空に現われると、地球の反対側のブラジルで宣教している小井沼眞樹子宣教師の所には現れないことになる。明らかに、神話的、黙示的表現である。新約聖書の最後の書、ヨハネ黙示録の最後 22章 20節には「以上すべてを証しする方が言われる『然り、わたしはすぐに来る。』アーメン、主イエスよ、来てください」とキリストの再臨を持ち焦がれている言葉で結んでいる。旧約聖書、第一巻の創世記の冒頭には、神による天地とそこにある全ての創造を記している。初めに神が天地を創造されたのなら、当然、終わりをもたらしてください。「初め」と「終わり」がある。神はそうに歴史と時間を支配している。そして、終わりは神による歴史の完成、人間の全き救いの時である。この時を信じるのが終末信仰である。愚かで非科学的である。しかし、終わりの完成を望むから、苦難に耐え、今を喜びながら生きることができる。私はキリストの再臨を待ち望んでいる。